

## “To Be Is to Be Embraced by Grace”

### 「生きるとは恵みに抱かれること」

——アフラーシュテ氏講演をめぐる省察——

## "To Be Is to Be Embraced by Grace":

Reflections on Dr. Afrashteh's Lecture

SANO Tosei

佐 野 東 生

### 概 要

本論ではセピーデ・アフラーシュテ氏による 2025 年 10 月 11 日の日本オリエント学会大会の講演を評価する。本講演は仏教とイスラーム、特に親鸞とイスラーム神秘家・ルーミーの思想について、まず崇拜対象の神仏を比較し無限性と慈悲の共通性を示したが、イスラームの神には畏怖される面もあり、それが両者の信心にも微妙な相違として反映する。講演では次いで救済論で善悪を問わない慈悲による救済が強調されるが、ルーミー思想ではイスラーム的価値観から救済に差がある点、また救済と関係する祈りについて易行の念仏に比べ、ルーミーのセマーは特殊な心身技法である点で相違すると思われる。

キーワード：親鸞、ルーミー、慈悲、信心、救済

### Abstract

This paper evaluates the lecture by Sepideh Afrashteh at the Japan Society for Near Eastern Studies Annual Conference on October 11, 2025. The lecture focused on the ideas of Buddhism and Islam, particularly those of Shinran and the Islamic mystic Rumi. It first compared the deities worshipped in Buddhism and Islam, demonstrating their shared values of infinity and mercy. However, the Islamic God is also feared, and that this is reflected as difference in the faith of both. Next, on salvation, according to the lecture both emphasize salvation through mercy, regardless of good or evil, but there seems to be a difference in Rumi's thought following the Islamic value. Regarding prayer related to salvation, Rumi's sema, a special mental and physical technique, differs from the easy practice of nembutsu.

Keywords : Shinran, Rumi, mercy, faith, salvation

### はじめに

2025 年 10 月 11 日、12 日にかけて、日本オリ

ント学会第 67 回年次大会が龍谷大学で開催された。同学会は三笠宮崇仁親王（昭和天皇実弟）により、文明発祥の地である古代オリエント（中東）の考古学を軸に 1954 年に設立された学会で

ある。現在は一般社団法人として同じく中東に発するイスラームの歴史・文化研究を含め活動している。

11日の公開講演会では第一部で岩井俊平・龍谷大学教授によりパーミヤーンの仏教遺跡とイスラームの関係について、最新の考古学的調査に基づき講演がなされた。考古資料によりイスラーム化以降8世紀から9世紀に至るまで仏教が存続し、イスラームとの共存もなされていた可能性に触れる興味深い内容だった。

第二部ではセピーデ・アフラーシュテ (Dr. Sepideh Afrashteh)・日本学術振興会外国人特別研究員による仏教とイスラームを比較する講演(英語: 通訳佐野)がなされた。”To Be Is to Be Embraced by Grace”「生きるとは恵みに抱かれること」との題で、親鸞思想と著名なイスラーム神秘家・ルーミー (Jalāl al-Dīn Muḥammad Balkhī Rūmī) (1207-1273) の思想を慈悲を中心に比較する内容だった(図1)。



図1 公開講演会の模様

(中央: アフラーシュテ、左: 佐野、右: 塩野崎・龍谷大学文学部准教授)

講演ではイスラーム神秘思想に基づいた仏教・イスラーム双方が崇敬する「聖なるもの」の共通性を軸に、その最大の性質である慈悲を比較し、それを元にいわゆる「悪人正機」にみられる善悪と救済の問題にも触れるという新しい内容だったといえる。本稿では本講演について、講演の紹介を兼ねて内容の順に沿って論評する。

## 1. 「聖なるもの」の比較をめぐる

宗教学者オットーは諸宗教・信仰が崇拝する神

聖な存在・原理を「聖なるもの」と名付けた。仏教では仏陀や阿弥陀仏などの仏、また真如、空といった究極の真理がそれであり、イスラームでは唯一神アッラー、神秘主義ではハック (Haqq: 真理) などと呼ばれる究極の实在がそれにあたる。本講演ではイスラーム神秘思想、特にイブン・アラビー (Ibn ‘Arabī) (1165-1240) が創設者のひとりであるイルファーン (Irfān: 神秘哲学) における存在一性論に基づき、人間を含む万物を究極存在の顕現とする前提で大乘仏教の真如との比較が行われる。ルーミー思想もこの枠内で論じられるが、ある程度留意すべきなのはルーミー思想が存在一性論をどの程度反映しているか検証が必要と思われることである。その主要著作は『マスナヴィー』(Masnavī-ye ma‘navī) をはじめ多くが詩編であり、そこから存在一性論と比較しうる体系的神秘思想を再構築するのは簡単ではない。

また注意すべきは、スーフィズムと呼ばれるイスラーム神秘主義とイルファーンにある程度温度差がある点である。スーフィズムは本来、スーフィー (イスラーム神秘主義者) によるハックとの合一を目指す修行の道で、のちには指導的スーフィーを核にタリーカ (神秘主義教団) が発生する。ルーミーも本来はそのひとりとする見方は有力で、後継者によりメヴレヴィー教団という今日までトルコを代表するタリーカが形成されている。他方、イルファーンは神秘主義を理論化した思弁的哲学であり、特にシーア派が主流派のイランではサファヴィー朝以来、イスラーム法学者間でイルファーンは認めるがスーフィズム、特にタリーカは認めない傾向がある。ルーミーについても「スーフィー」より「神智家」(‘arīf) との敬称が好まれる (Knysh 2017 36-37)。ルーミー思想を総合的に論ずるにはスーフィー的、実践的側面も無視できないと思われるが、イラン的視点からはイルファーンの見方に偏る傾向もなしとしない。アフラーシュテ氏もイラン人だが、神秘主義教団のひとつ・クブラウィー教団に属し、スーフィズムを熟知している。とはいえ、本講演から「イラン的」イルファーンの視座がある程度看取される点是指摘しておく。

本講演では親鸞の言葉を引用し、真如: 仏性が

法身で、「法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして、方便法身と申す御すがたをしめして、…」(『唯心鈔文意』『浄土真宗聖典 第二版』(以下『聖典』)710)との解説から、無形で永遠の真理：真如そのものである法身から「方便法身」、すなわち応身、あるいは報身の姿ある仏が衆生救済のため顕現するとの大乗仏教の仏の三身思想が示される。阿弥陀仏もその一体で、「法身如来」と呼ばれる。ここから、究極の实在であるハックから人格神であり様々な属性を有するアッラーが顕現するとのイルファーン思想との共通性が見いだされるとする。

本講演のコメンテーターを務めた井上<sup>1)</sup>は、法身からの阿弥陀仏の顕現について、イスラームではハックからアッラーへの一対一対応であるのに対し、仏教では真如から阿弥陀仏のみならず多数の仏への顕現となるため一対多対応となり、相違すると指摘される。だが親鸞思想では阿弥陀仏は諸仏の顕現の元というべき根源的仏であり、この点でイスラームとの近接性があるともみられると指摘する。

井上はイスラームの神による創造を前提に、存在一性論においてハック：究極の实在の創造過程として万物が顕現するのに対し、仏教では完全なる真如と不完全で迷いに沈む衆生・万象とは断絶があり、この点が大きく相違するとする。ただし大乗仏教では万物に悟りの可能性を秘めた仏性を認め<sup>2)</sup>、親鸞思想では後述の阿弥陀仏の慈悲によって衆生は悟りに至れる、すなわち不完全から完全に至り、断絶が克服される。つまり、イルファーンに基づけば仏教との存在論的相違があり、かえって本来のイスラームにある創造神と人を含む被造物の断絶が仏教に近いともいえる。他方で、仏教において慈悲にせよ禅などの修行にせよなんらかの方法で断絶を克服し悟りに至るのは、イスラーム神秘主義で存在顕現の根源に合一する過程との接点があるようである。この存在論にまつわる相違点、接点を踏まえて両宗教の比較はなされるべきであろう。

## 2. 慈悲と信心の比較をめぐる

講演では両宗教の「聖なるもの」の顕現体である阿弥陀仏とアッラーの属性、つまり本来的に有する性質について比較がなされる。まず阿弥陀仏のサンスクリット語名：アミターユス(Amitāyus：無量寿)によってわかるように、阿弥陀仏は無限の生命を有する仏であり、これに対しアッラーの属性を示す99の神名のうちアル・ハイイ(al-hayy：永遠の生命)が類似の性質として挙げられる。アッラーは永続する生命を有し被造物を支え、導き、統治する存在であり、無量寿仏である阿弥陀仏と存在の無限性における共通性が指摘される。しかし阿弥陀仏は創造神ではなく、不完全な衆生を救済するが元は法蔵菩薩という修行者であり、万物を支え、「統治」する全能の主とその隷下の人間といった垂直的關係には乏しいと思われる。

この上に慈悲の比較がなされる。仏教において空の思想の創設者・龍樹によれば慈悲は三種に分かれ、まず親子間など一般大衆が他者に持つ衆生縁の慈悲、次いで悟りを得た諸仏が迷える衆生を憐れみ救う法縁の慈悲、最後にあらゆる縁の消えた空の境地からの無縁の慈悲がある(佐野 2025 291)。講演では中国浄土教の大成者・善導の『観念法門』から「ただもっぱら阿弥陀仏を念ずる衆生のみありて、かの仏の心光つねにこの人を照らして、摂護して捨てたまわず」(『浄土真宗聖典 七祖編』1996 618)との文を引用し、無量光仏(無限の光)でもある阿弥陀仏の光が念仏を唱える衆生を包むとする。さらに親鸞による、阿弥陀仏は念仏者を見捨てず救うことを意味する「攝取」(せっしゅ)<sup>3)</sup>との言葉から、阿弥陀仏の慈悲が「大悲」と呼ばれる衆生の不完全さを問わない無条件の慈悲、つまり先に挙げた第三の無縁の慈悲であることが説明される。

イスラームの慈悲についても、講演ではアル・ラフマーン(al-rahmān：慈愛)と呼ばれるアッラーの慈悲について、クルアーンを引用しながら信徒のみならず被造物一般にも及ぶ無条件の慈悲であることが指摘され、この点で阿弥陀仏の大悲と共通性があるとする。ただここで留意すべき

は、牧野も指摘するアッラーの「二面性」である（牧野 1979）。「タクワー」（taqwā：敬神）はイスラーム教徒が神に抱くべき基本的態度だが、その本来の意味は神を恐れることで、アッラーはユダヤの神やハウエ同様に<sup>4)</sup>、教えに従わず悪をなす人々を罰し、ときには民族ごと滅ぼす恐ろしい復讐の神でもある。クルアーンにはタクワーとその派生語が多くみられ、次のように神を畏れることが命じられている：

信仰する者たちよ、もしおまえたちがアッラーを畏れ身を守るなら、彼はおまえたちに識別（furqān）を与え、おまえたちの悪事を帳消しにし、おまえたちを救し給う。（8：29）

ここで識別：フルカーンとは真偽を見分ける力を示し、クルアーンの代名詞でもある（Penrice 2016 109）。アッラーを畏れることで信徒はこの識別力を得、その上これまで犯した悪事も神の慈悲によって赦してもらえるのである。すなわち、アッラーの慈悲と復讐の両面は表裏をなし、人々が畏怖を抱き従うなら慈悲を垂れて識別を与え救うとの構造がみえてくる。阿弥陀仏の大悲に比べ、同じ無条件の慈悲ではあるが裏面に畏怖を抱かせる性質がある点にある程度違いがあるともいえるだろう。

これらの慈悲を前提に、「生きるとは恵みに抱かれること」との題、すなわち阿弥陀仏、アッラーの衆生の無条件の慈悲という恩寵・恵みによって万物は生かされている、という内容に至る。この慈悲の恵みを素直に受け取るのが真の信心であり、講演では親鸞の『歎異抄』から次の言葉が引用されている。

念仏申さんとおもひたつこころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少・善惡のひとをえられば、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆゑは、罪惡深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。（『歎異抄』『聖典』831-832）

つまり、阿弥陀仏への念仏を唱えようとする心だけがあれば、たとえ念仏を唱えずとも衆生は阿弥陀仏により攝取され、救済される。この心が信

心であり、阿弥陀仏の大悲があつてこそ恐れず素直に信心を持ち、すべてを委ねることができるのである。親鸞はこの信心を「金剛堅固の信心」<sup>5)</sup>などと呼び、阿弥陀仏の本願に応える衆生に備わるとしている。そこに自己努力で救済、悟りに至ろうとの自力はなく、本願に委ねる他力のみがある。

これに対しイスラームでは、講演でも述べられたように信心はイーマーン（imān）と呼ばれ、やはり神の慈悲を前提に信心することには変わりはないが、先述のように慈悲と表裏にある畏怖を覚える性質もこの信心の因となる点で異なると思われる。ただし神秘思想、特にルーミーにおいては、神の万物に対する愛、慈悲が強調され、万物を「愛の法則」が貫くと謳われる（佐野 2025 288-291）。この神聖な「愛」（‘ishq）はルーミー思想の基盤をなし、いわば「愛の神」を人々は「愛し」、信じ、救済されることになる。それでもルーミーの詩編において神が不信心者や悪行なす者に罰を加えるエピソードはあり、本来のイスラームの復讐する神としての面は生きていとみられる。講演でも、「神の慈悲は自己努力する人々を助けるが、神に完全に服従する人々こそ神の限らない恵みに支えられ、容易く耐え忍び、救済を得る」と説明され、親鸞と異なり自己努力、自力を完全に否定していないように受け取れる。つまり、ルーミーを含め本来のイスラームの信心のあり方が、信心の対象の性質を踏まえて反映し、そこが阿弥陀仏への「金剛」の信心と微妙に異なるといえるのではない。

### 3. 救済観の比較をめぐって

講演では次いで『歎異抄』第三条の有名な「悪人正機」を基に、善人や悪人、あるいは善行や悪行と救済の関係について論じられる。イスラームでは本来、アッラーの命に従い善行をなした人々が死後天国に救済される。仏教でも善惡と救済：悟りのあり方は大きく相違しないが、親鸞は「悪人正機」説にみられるように、悪人、善人を問わない阿弥陀仏の慈悲による救済を唱える。ただし親鸞は悪人が救済されるからといって故意に悪行をなす者を「薬あればとて毒をこのむべからず」

（『歎異抄』第一三条『聖典』843）と否定する。親鸞のいう悪人とは、生きる上でときに罪惡を犯さざるをえない衆生を指すとみられ、それでも先に述べた金剛の信心を得れば罪惡なす身のまま阿彌陀仏の慈悲によって救われるのである。

ルーミーにおいても善惡を問わない救済のあり方が示唆される。クルアーンの「まことに我々は神に属し、神のもとに帰る」（2：156）に基づき、ルーミーはすべての人が最終的に神に回帰するとする一方、講演ではこの帰還は善人と罪ある人の両方を包含するが後者にとってはより遅く、困難なものとなるかもしれないことを認める。またルーミーの『マスナヴィー』の次の一節：

かの慈悲はすべてに降り注がん 悪にも善にも、あまねき慈悲により（*Masnavi* I: 3614）

を引用し、神の慈悲が善人、悪人を問わず注がれることが示される。結論として、善惡を問わない慈悲と救済において親鸞とルーミーは同様だが、阿彌陀仏の救済が死後の浄土往生によって成就するのに対し、ルーミーにおいては現世の生の中で神：ハックとの合一によって実現される点が異なると指摘されている。

ここで留意すべきなのは、イスラームにおける善惡観がルーミーにも反映していると思われる点である。周知のようにルーミーは13世紀に中央アジアから父らとともにトルコに移住し、コンヤでウラマー（イスラーム学者）およびスーフィーとして教育・布教活動を行っていたが、1244年にペルシア系スーフィー・シャムセ・タブリーズィーと会い、（神を）愛する者から「愛される者」、つまり神と一体化した境地に劇的転換を遂げる。以降は神の愛、慈悲を軸とした神秘思想を『マスナヴィー』などの詩編で謳っていくが、同書にも明らかな通り、終生イスラームから逸脱せず、尊重する姿勢を貫いている。神の愛で万人が救われるとはいえ、講演にもあるように悪行なす人より善人の方が優先されることは否定できない。『マスナヴィー』には本来のイスラームの教え：善を勧め悪を禁じる、との神命に則った逸話もみられるのである。

さらに、救済と関連する祈りの比較の問題もあ

る。親鸞の念仏は、阿彌陀仏の本願への信心を表す「易行」であり、悟りに至る修行の一環としての念仏とは異なる。親鸞は自力による悟りを求める人を「自力作善のひと」として否定的に捉えている（『歎異抄』『聖典』833）。これに対しルーミーの場合、スーフィズムにおける神：ハックとの合一を目指す祈り：ズィクル（zikr）、その心身技法として創始したセマー（sema）：身体を回転させアッラーと唱える祈りを行っていた。シャムセ・タブリーズィーとの出会いのあとの劇的変貌によって、通常のスーフィズムの祈りとしてのズィクルというよりも、自身がすでに神と一体化している陶醉、歓喜の表現としてセマーはなされていたとみられる。

例えばルーミーの聖人伝での逸話として、ある日ルーミーがマドラサ（イスラーム神学校）でセマーを行い陶醉の境地となり、服をすべて脱いで下着一枚となりほころびかけたが、そこで後継者となる弟子のフサームッディーンが進み出てルーミーに自分の衣を着せ、かくしてセマーは再開され三日三晩にわたり陶醉境に浸り、ルーミーは神との合一の境地を表す長い詩編を謳ったという（Aflakī 1980 602; 2002 413）。フサームッディーンが同席していることからシャムセ・タブリーズィーとの出会いのあとにセマーがルーミーと弟子のグループ内で継続的になされたことがわかり、いかにも忘我の境地でなされる好例といえる。だからこそ、たとえスーフィーの修行法からは距離を置いていたといえ、易行の念仏と比べ一般人にはなし難い心身技法・表現であったといえる。この点は講演にもあった現世の合一か浄土往生かの救済の差にも呼応し、また合一を達成した人への救済の優先性も示唆する可能性がある。それを証するかのように、ルーミー没後、その子孫と弟子らによりメヴレヴィー教団が創設され、セマーは歓喜の表現とともに「自力作善」的修行法として成立していったとみられる。

以上のように、この省察ではアフラーシュテ氏の講演について、存在論、慈悲と信心、そして救済論の見地から暫定的評価を試みた。本講演はイラン人専門家による踏み込んだイスラームと仏教の比較考察であり、親鸞とルーミーという両宗教の著名な宗教者・思想家の比較を行い、その具体

的共通性を示した点で極めて貴重な内容であったといえる。ただし講演の時間制限もあったものか、共通点が強調され、相違点への言及は乏しかった嫌いがある。今後はより総体的に両者を比較し、より立体的、客観的な比較研究が行われることが期待される。

## 注

- 1) 井上善幸・龍谷大学文学部真宗学科教授
- 2) 中国で編纂された『大乘起信論』にある「本覚」：一切衆生に内在する悟りの智慧に基づき、日本で中世に発展した本覚思想などにみられる。そこでは万象はあるがままで悟りを実現しているとされる。
- 3) 「攝取」の解釈として、「摂（おさ）めとる。ひとたびとりて永く捨てぬなり。摂はものの逃ぐるを追はえとるなり。摂はをさめとる、取は迎へとる」とある（『浄土和讃』『聖典』571脚注）。
- 4) イスラームではアッラーはユダヤ教、キリスト教の唯一神と同一である。
- 5) 親鸞が浄土真宗の七高僧を讃えた『高僧和讃』の善導賛に次の一首がある（『高僧和讃』『聖典』591）。  
 金剛堅固の信心の  
 さだまるときをまちえてぞ  
 弥陀の心光摂護して  
 ながく生死をへだてける

## 参考文献

- 佐野東生（2025）「ズィクルと念仏一神仏の愛にゆだねる道」嵩満也・佐野編『仏教・イスラーム・キリスト教：祈りと思想の共鳴』法蔵館 275-297
- 浄土真宗本願寺派総合研究所編（2004）『浄土真宗聖典—註釈版 第二版—』本願寺出版社
- 浄土真宗本願寺派総合研究所編（1996）『浄土真宗聖典七祖編 註釈版』本願寺出版社
- 中田考監修（2014）『日亜対訳 クルアーン』作品社
- 牧野信也（1979）『アラブ的思考様式』講談社
- Aflākī, Shams al-Dīn A. (Yazıcı, T. ed.) (1980), *Manāqeb al-‘Ārefīn*, Türk Tarih Kurumu Basımevi, vol.2
- Aflākī, Shams al-Dīn A.; O’kane J. (translation) (2002), *The Feats of the Knowers of God (Manāqeb al-‘ārefīn)*, Brill.
- Āzarīzādī, M. ed. (2005), *Masnavī-ye Ma’navī*, Enteshārāt-e Pazhūhesh
- Knysh A. (2017), *Sufism: A New History of Islamic Mysticism*, Princeton University Press
- Penrice J. (2016), *A Dictionary and Glossary of the*